

---

# 乗り過ごし

木俣収

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乗り過ごし

### 【Nコード】

N2410D

### 【作者名】

木俣収

### 【あらすじ】

最終電車を乗り過ごした男が降りた駅。そこにあった・・・

その男は、会社帰り散々に飲んだ。

そして、終電に乗り、眠ってしまった。

気が付くと、電車は男が降りる駅のひとつ向こうの駅に停まっていた。

男はあわてて降りる。

「しまったなあ。寝過ぎちゃったよ。」

終電は行ってしまった。

「そういえば、小さなころからこの辺りに住んでいるけど、この駅で降りたのは初めてだな。」

タクシーを拾おうと、寂れた駅の外に出る。

すると、駅の斜め向かいに、小さなバーの明かりが見えた。

「まだ、やっているのか……。もう少しだけ飲もうかな。」

その明かりに誘われるように、男はバーの扉を押す。

「いらっしやいませ。」

店のなかは、ママが一人いるだけで、他に人はいなかった。

そのママは30歳過ぎくらいで、少し化粧は濃いが、なかなかの美人だった。

「まだ、いい？」

「ええ。どうぞ。」

カウンター席に座り、水割りを頼む。

「お久しぶりですね。」

「え……。」

男は少し驚いたように彼女を見る。

「初めてのはずだけど。」

「もう、そういう冗談が大好きね。」

なるほど。これは、ママの冗談なのだ。そう合点した。

男はそれにのってみることにしてみた。

「そうなんだよ、下手な冗談でね。」

「ふふふ。」

グラスを回しながら、常連のふりをして会話を弾ませる。  
そんな会話が一息ついたところで、男が言う。

「そういえば、この辺りは駅の改築で、立ち退かなくちゃいけないんじゃないのかい？」

「ええ、そうなんです。」

「じゃあ、ここも？」

「はい。もうすぐ閉めるんです。」

「そうか……。」

しばしの沈黙が続く。

「初めて来た店だけど、なんだか寂しいね。」

「もう、またその冗談ですか？それがお好きね。」

「え、いや、だから……。」

どうも、彼女の態度からして、本心で男がこの店に来たことがある  
と思っているようだった。

でも、男には全く覚えがない。

他で出会ったのだろうか。

いや、彼女のような美人を忘れるはずがない。

「どうなさったんですか？」

「いや、いいんだ。もう行くよ。」

立ち上がり、会計を済ます。

ドアを開け、出て行く男に彼女は深々と頭を下げて言う。

「長い間、ありがとうございます。一郎さん。」

外に出た男は、タクシー乗り場に向かって歩く。

いちろっ……。

ちよつとまで、今、一郎って言ったか。

一郎は、おれの親父の名前じゃないか。

つい、この間亡くなった。

振り返って、さっきの店を見ると、さっきまで明かりがついてい

たとは思えないほど、暗くひっそりとたたずんでいた。

「飲みすぎたのかな。」

停まっているタクシーに乗り込み、行き先を告げる。  
静かに、タクシーは走り出す。

初老の運転手はバックミラー越しに男を見て言う。

「お久しぶりですね。」

「え．．．。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2410d/>

---

乗り過ごし

2011年1月16日01時03分発行